

井上円了の社会的実践—国民道德論の構想と実践

佐藤厚（東洋大学）

井上円了（1858-1919、以下、円了と略称）は哲学館（東洋大学の前身）を創立した、明治から大正にかけて活動した哲学者、仏教者、教育者である。円了の活動は、前半生の哲学館を中心とした学校教育と、後半生の修身教会・国民道德普及会による社会教育とに区分できる。この中、社会教育の中心となるのは「教育勅語」に基づく民衆の道德の教化である。この「教育勅語」に基づく日本道德論は一般に「国民道德論」と呼ばれる。さて後半生の活動については円了の著作に基づいた研究の蓄積はあるが、実際に円了がどのような講演を行ったのかという視点に立った研究はなかった。そこで本発表では、(1) 円了の国民道德論の形成の流れを整理し、(2) その具体的な説きかたを分析して、その特徴を指摘したい。

(1) 円了思想の基本的枠組みは国・真理（哲学）・仏教という三項の一致である（『仏教活論序論』明治 20 年）。当初は仏教の宣揚、キリスト教排除という目的から仏教の比重が大きかったが、「教育勅語」の発布（明治 23 年）とその解釈を通じて国（日本）の部分徐徐に大きくなっていく。すなわち『忠孝活論』（明治 26 年）では忠孝と皇室の関係を論じ、『勅語玄義』（明治 35 年）では日本の忠孝は「絶対的忠」として、他国と比較してその純粋性、卓越性を強調する。円了の国民道德論はここで完成する。哲学館事件の後、その処理をめぐって円了は学校運営から離れ、哲学堂の構築と修身教会の実践とに専念するようになる。哲学堂はいわば円了の思想世界の具現であり、修身教会（後に国民道德普及会に改める）は円了の道德思想の宣布である。哲学堂は大きくは精神修養の場であるが、そこには哲学のほか仏教、教育勅語の理念も盛り込まれている。ここから前期思想の国・真理（哲学）・仏教の枠組みが生きていることがわかる。一方、修身教会の活動として、円了は全国を巡回し「国民道德」のほか、妖怪学である「心理的妖怪」などの講演を行い、道德の宣揚、民衆の啓蒙に努めた。同時に巡講先では有料で揮毫を行いその費用を哲学堂の整備に充てた。最晩年、円了は哲学堂を「哲学宗」の本山とすることを目的としていたが、大正 8 年、中国大連での講演中に逝去し、実現することはなかった。

(2) 円了は実際に民衆に対してどのように国民道德を説いていたのであろうか。大正 7 年の朝鮮巡講で説かれる国民道德に関する講演を分析すると次のパターンで話が展開する。a 国民道德の淵源は教育勅語（あるいは戊辰詔書も含む）である。b その中核は忠孝であり、日本の忠孝は西洋、中国（支那）とは異なり優れた特質を持つ。c 東洋を代表する国は日本である。よって朝鮮の併合は天の使命である。また中国を支援し東洋世界を盛り上げなければならない。この中、a、b は理念であり『忠孝活論』、『勅語玄義』などで説かれるものと同じである。ただ、この中には仏教は出てこないことに注意される。また c は現実問題である。明治から大正にかけて日本は戦争を経て領土を拡張したのであるが、そのありかたの是非を自問することなく、そのまま追認する。これは明治初期の素朴な国権拡張主義者が現実をそのまま受け入れている姿にも見える。このように円了自身の思想世界と、それが講演として表れたものとの間の差には注目しなければならない。